

## 「心」論

### 内省的知識人の自己崩壊

吉田俊彦

#### はじめに

《昔から内省の力に勝っていた兄さんは、あまり考えた結果として、今はこの力の威圧に苦しみだしているのです。兄さんは自分の心がどんな状態にあるうとも、一応それを振り返って吟味したうえでないと、決して前へ進めなくなっています。》(中略)私は兄さんの話を聞いて、はじめてなにも考えていない人の顔が、いちばん気高いと言った兄さんの心を理解することができました。兄さんがこの判断に到着したのは、まったく考えたお蔭です。しかし考えたお蔭でこの境界にははいれないのです。》(塵勞三十九、傍点引用者)

これは、漱石が「行人」において、内省的知識人一郎の苦悩に満ちた内的世界をHの眼を通して捉えたものであるが、一郎の「内省の力」が生み出すこの悲劇の構造は、「心」における「K」とか「先生」の悲惨な「死」の意味を解く重要な鍵になるものと考えられる。

この小論では、まず、「心」の執筆モチーフを作品的に整理し、次いで「心」と「行人」の人物形象にみられる対応関係に注目し、最後に、「先生」の殉死の設定意味について考えてみたい。

#### 一 「自裁」の作品的地位

「恋愛」に関する裏切りを扱ったものとしては、すでに、「薔露行」「それから」「門」がある。

《「盾のうちになにをか見る」と女は水の向より問う。「ありとある蛇の毛の動くは」とウイリアムが目を持たずに答える。「物音は?」「鷺筆の紙を走ることくなり」》

「幻影の盾」の漱石は、「蛇の毛」の動きと音とをウイリアムの耳目から払い、

彼を「幽かなる」「常闇」の中に立たせ、そして、「闇に鳥を見ずと嘆かば、鳴ぬ声さえ聞かんと恋わめ―身をも命も、闇に捨てなば、身をも命も、闇に拾わば、嬉しかろう」という女の声で「玲瓏虚無」の世界に誘うのである。盾とウイリアムが「びたりと合―い」「純一無雑の清浄界」において成就するクララとの愛は、清浄甘美な幻想的愛といふことができる。運命の呪詛の声は、どこまでも、ウイリアムの心の外から聞えてくるのであり、呪縛の力はクララの命を襲うのである。ウイリアムがその声と力に耐える時、悲運に暮れた無明の闇は美しく明け放たれるのである。

ところで、「薔露行」の漱石は、ギニヴィアのランスロットと愛を語る夢の中で、ギニヴィアの金冠の底にめぐる蛇の動きを制止しようとはしない。

《頭は君の方へ、尾はわが胸のあたりに。波のごとくに延びるよと見る間に、君とわれは腫さき繩にて、断つべくもあらぬまでに纏はるる。中四尺を隔てて近寄るに力なく、離るるに術なし。たとひ忌はしき絆なりとも、この繩の切れて二人離れがにをらんよりはとは、その時苦しきわが胸の奥なる心遣なりき。》

「蛇」の姿をギニヴィアの心に焼きつけ、やがて、それを「めら／＼と燃え出す」「薔薇の花の紅」の炎熱で「あやしき臭ひ」に焦す漱石は、「幻影の盾」の蛇の持つ暗い運命的力の中に性の妖しく無気味な力を強く捉えなおしたということが出来る。運命の呪詛の声は、ギニヴィアの情念に燃える心底から聞えてくるのであり、呪縛の力はランスロットの命を襲うのである。ギニヴィアがその声と力に耐える時、悲運に暮れた無明の闇は、ただ「冥府」への道を開くのである。

《引き付けられたる鉄と磁石の、しぜん引き付けられたれば咎も恐れず、世を憚りの関一重あなたへ越せば、生涯の落ち付はあるべしと念じたるに、引き寄せたる磁石は火打石と化して、吸はれし鉄は無限の空裏を冥府へ陥つる。》

「それから」と「門」は、このギニヴィアの思いを新たな視角から捉えなおしていくところに生れたものといえよう。

「百合の花を眺めながら部屋を掩う強い香の中」(それから十四)で「自然の昔に帰る」(同)代助の心を描く漱石は、ギニヴィアの「鉄と磁石」が引き合う自然の論理とウイリアムの「純一無雑の清浄界」に成就した幻想愛を結び合わせ、文明論的視角からの新たな解釈を加えているということが出来る。三十年代に愛を

告白した後、代助の心を襲う不安は罪苦によるものとはいえない。「個人の自由と情実を豪も斟酌して呉れない機械の様な社会」(それから十五)と対決しているかねばならない覚悟を固めながらも、その具体的な方策の欠如と「生活の墮落は精神の自由を殺す」(同十六)というふっ切れない高等遊民意識のために、開化の「暗黒」(同六)の底知れない奈落を覗かねばならない不安である。

これに対し、「門」において、「いつ吹き倒されたかを知ら」(門十四)ず「砂だらけにな」(同)りながら、「残酷な運命」(同)の気紛れをただ「無念に思」(同)わねばならない宗助を描く漱石は、ギニヴィアの捉えた「鉄と磁石」が引き合う自然とウイリアムが「幻影の盾」の纏れる蛇の低い音に聞いた無気味な暗い運命の力を結び合わせながら「冥府へ墮つる」ギニヴィアの思いに、存在論的視角からの新たな解釈を加えたことができる。「月日という緩和剤の力」(十七)によって、罪を「甘い悲哀」(同)の奥に忘れ去る不遜な生活を送りながらも「普通の人がめったに出逢わない偶然」(同)の不意打を喰う宗助は、御米まで「他人」の一人に「勘定しなければならぬ」(同)い孤独の中で「残酷な運命」に脅かされ、また「臍帯纏絡」(十三)のための死産を己の「絞殺」として「徳義上の苛責」(同)を背負う御米は、「ともに苦しんでくれるものは世界中に一人もな」(同)いという孤独の中で「運命の厳かな支配」(同)に戦くのであるが、この二人に負わされたものは、人間存在の根源に動く運命としか呼びぶようのない不可思議な力と底知れない不安と不遜な我執であったといえよう。

「彼岸過迄」と「行人」における漱石が存在不安の原点にまで遡ろうとする肌寒い神経の凝結を示すのは、当然の成り行きといわねばならない。暗い過去と開化の「暗黒」と性格的病弊の輻輳する力学を一郎の苦悩の形象に働かせる漱石は、運命としか呼びぶようのない不可思議な力の正体を可能な限り見届けようとしたといえるのではなからうか。「心」の漱石が対峙しなければならなかったものは、「彼岸過迄」と「行人」において見届けたこの不可思議な力の正体に他ならない。両親に対する須永の記憶を「生長の後に至って遠くの方で曇ら」(須永の話三)し「世の中と接触する度に内へとぐるを巻き込む」(松本の話一)神経質な内向的性格に須永を追いやった父の死の間際の言葉とか葬儀の日の母の言葉の謎を解明する漱石は、「母なるもの」を喪失した存在不安の深みを見届けたといえるの

であり、また、際限のない猜疑と検証とを重ねながら「家中から変人扱いにされるのみならず、親身の親からさえも、日に日に離れてゆく」(帰ってから二十一)一郎の底知れない不安の根源を探索する漱石は、「美的にも倫理的にも、知的にも鋭敏すぎ」(甲でも乙でも構わないという鈍なところ) (塵勞三十八)が許せない「内省の力」(同)の「威圧」に喘がねばならぬ存在不安の深みを見届けたといえるのである。「心」は、この母なるものの喪失と鋭敏な内省の力の威圧を一つの時代の終焉という歴史状況のもとで内省的文化的文化論の視角から捉えなおし、新たな時代の可能性乃至は新たな共生への可能性を眺望しようとするところに生れたものといえることができる。

## 二 「母なるもの」の喪失

須永の見届けなければならなかった「母なるもの」の喪失が魂の安穩な休息所を持たなかった漱石自身の不幸な原体験に根ざしていることは、「道草」「硝子戸の中」などから容易に推定できる。幼い漱石の愛を確める養父母の、異常な物質的優遇と執拗な画策と恐しい束縛に脅かされ陥った存在不安(道草四十、四十一)と引き取られた実家では小さな一箇の邪魔者としてしか扱われず(道草九十一)、普通の未っ子の様には決して可愛がられなかった(硝子戸の中二十九)日々の寂寥と、そして、老眼の眼鏡越しにじっと見守る視線(硝子戸の中三十七)とか悪夢の苦しみを払う優しい微笑と慰藉の言葉(同三十八)によって唯一の安息の思い出を残してくれた実母の死による多感な少年の日の悲哀などを見落すことはできない。「心」の「先生」と「K」に見られる「故郷喪失」という悲運が、この母なるものの喪失に深い根を持つものであることはいままでもない。

財産権領という叔父の裏切りによって「故郷を離れる決心」(心下九)を固める「先生」、そして、自己の道を通す「剛情」(同二十一)によって親からの「勘当」(同)を余儀なくする「K」。漱石は、この二人の「故郷喪失」という悲運の上に、さらに新たな生活の場の「東京と東京の人」(同十九)に対する共通の「畏れ」(同)を重ね、その孤絶状況のもとに友愛を見出すのだが、これは漱石にとって「偽の器」(塵勞三十七)を造り出す前近代的な「である論理」の枠組みを払い、「自由と独立と己れとに充ちた」(心上十四)近代の人間関係を見据

えるための原点の獲得だったということができよう。

「K」が、畑有三氏の指摘(注5)のとおり「精神優位観」を持った「修養第一主義」者であることに疑いを入れる余地はない。問題は、こうした「K」に対し「先生」がどのような認識上の役割を負わされてどのように位置づけられているかということである。「中学でも高等学校でも、Kの方が常に上席を占めてゐる」(心下二十四)のために「先生」が「平常から何をしてKに及ばないといふ自覚」(同)を持っていたことは確かである。しかし、すでに見てきたように、故郷の喪失と被害意識の畏れを「K」と「先生」に共有させ、同一の下宿屋に「孤絶の連帯」を結ばせる時点の漱石にとって、二人の友愛は絶望に裏打ちされた連帯の原点である。ここにおいて示される二人の個性には、その裸形を捉えることができよう。「Kは私より偉大な男でした」(同)という畏敬の念を抱いていた「先生」にも、「K」を下宿に引き取る時点においては「私の方が能く事理を弁へてゐる」(同)という自信を持たせ、さらに「彼の剛情を折り曲げるために、彼の前に跪まずく事を敢て」(同二十二)する画策まで用いさせる漱石は、「K」と「先生」のそれぞれに同等の力を持った個我的特性を与え、孤絶の連帯基盤の上で厳しく拮抗させようとしていたといえるのではなからうか。

ところで、「精神優位観」を持った「修養第一主義」者としての「K」に拮抗する「先生」の特性が具体的にどのようなものであったのか、ここで「心」の中心的劇要素の一つである「下宿の御嬢さん」を中にして起る「先生」と「K」との角逐の中に尋ねてみたい。

「K」の神経衰弱が「可くなって」(同二十八)いくのとは「反比例」(同)に次第に「過敏になって」(同)いく「先生」の疑惑と不安と検証衝動は重い具象性を見せている。「嫉妬は愛の半面」(同三十四)であるという明確な認識を持たされた「先生」が次第に過敏になっていく心底の動きの中に愛を明確に自覚していたことはいまでもない。問題は、この愛を具体化する方向に一步も踏み出せないままに躊躇する「先生」の抑制意識である。

まず注目すべきは、「道学の余習なのか、又は一種のはにかみなのか」(同二十九)「女に関して立ち入った話などをするものは一人もありません」(同)という時代風潮に支配された「先生」の抑制意識である。しかし、これはそのまま

「K」にも当てはめることができよう。「道のためには、凡てを犠牲にすべきものだ」(同四十一)という信条を持つ「K」には、むしろ「先生」以上の抑制が働くはずである。「先生」に抑制を強いるより根本的な事情はほかにあるものと考えなければならぬ。

《私の進みかねたのは、意志の力に不足があった為ではありません。Kの来ないうちは、他の手に乗るのが厭だといふ我慢が私を抑え付けて、一步も動けないやうにしてゐました。Kの来た後は、もしかすると御嬢さんがKの方に意があるのではなからうかといふ疑念が絶えず私を制するやうになったのです。果して御嬢さんが私よりもKに心を傾けてゐるならば、此恋は口へ云ひ出す価値のないものと私は決心してゐたのです。恥を掻かせられるのが辛いなどと云ふのと少し訳が違ひます。此方でいくら思つても、向ふが内心他の人に愛の眼を注いでゐるならば、私はそんな女と一所になるのは厭なのです。》(同三十四、傍点引用者)

「他の手に乗るのが厭だといふ我慢」は、叔父の裏切りを受けた衝撃と関わりを持つものであり、「私は何ういふ拍子か不図奥さんが叔父と同じやうな意味で、御嬢さんを私に接近させようといふ力めるのではないか」(同十五)という疑念が齎す我慢である。つまり、「先生」は、狡猾な策略の隠された「下宿の奥さん」の親切に乗せられて主体的な個我的尊厳性が凌辱されることを恐れたのである。「御嬢さんが私よりもKに心を傾けてゐるならば、此恋は口へ言ひ出す価値のないもの」とする「先生」の「決心」の奥底に働くものは、この個我的尊厳性を守ろうとする閉塞的な自我主義の確執である。この確執は、「スピリットを攫まなければ満足ができ」(兄二十)ず、猜疑と検証を重ねる「苦痛に充ちた」(塵勞三七七)表情で「女は腕力に訴える男よりはるかに残酷なものだよ。僕はなぜ女が僕に打たれた時、起つて抵抗してくれなかつたと思ふ。抵抗しないでも好いから、なぜ一言でも言い争つてくれなかつたかと思う」(同)という「行人」の一郎と「僕」には、自分に靡かない女をむりに抱く喜びよりは、相手の恋を自由の野に放つてやった時の男らしい気分分、わが恋の瘡痕を淋しく見詰めているほうが、どのくらい良心に対して満足が多いか分らない。(須永の話二十三)とする「彼岸過迄」の市蔵の思いに繫つているものである。「道」のために「頑固」(心下十九)であり「大胆」(同)であり「強い決心を有している」(同)「K」にこ

の確執を認めることはできない。

「先生」の特性は、「K」と同様に倫理的ではあるが、「物を解きほどこいて見たり、又ぐるぐる廻して眺めたりする」（同三）性癖と叔父の裏切りを受けたため人間不信（同十二）でもって自他の徳義心の分析と検索を重ねる猜疑心にその本質面を捉えることができる。「先生」の人間不信の背後にある「金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」（同二十九）という人間観を合わせ考えるとき、「精神優位観」を持つ「修養第一主義」者「K」に拮抗する「先生」の特性は、「金銭優位観」を持つ「猜疑第一主義」者と見なすことができよう。漱石は、この二つの個性の拮抗をどういう視角から捉え、どういう新たな生の認識を浮びあがらせようとしたのか、次にこの問題の検討を進めてみたい。

### 三 内省の力の威圧と時流の眺望

「書物で城壁をきづいて其の中に籠」（心下二十六）る「K」は、下宿当初、「下宿の奥さん」「御嬢さん」に対しても「知識と学問を要求し」「それが見付からないと、すぐ軽蔑」（同二十五）し、そして、彼女達との雑談さえも軽侮してそれに加わりうとしないのだが、これは、「行人」の一郎の特性をそのままに受け継ぐものである。「K」を「人間らしくする」（同二十五）ために「まず異性の傍に彼を坐らせ」（同）ようとする「先生」の試みを設定する漱石は、「学問をして高尚になり、かつ迂闊になりすぎ」「親身の親からさえも、日に日に離れてい」（帰ってから二十二）った一郎をその知性的高みから日常性の中に引きおろし、「内省の力」（塵勞三十八）に勝れ強固な個我的優位性を誇る知識人一郎の限界を見定めようとしたといえるのではなからうか。

「K」は「先生」の試みが功を奏し、「下宿の奥さん」「御嬢さん」とも「段々親しくな」（心下二十七）り、やがては「御嬢さん」への愛が抑え難いところまで大きく育つのであるが、問題は、この愛に対する「K」の身の処し方である。

「斯うと信じたら一人でどんどん進んで行く丈の度胸もあり勇氣もあ」（心下四十）る「K」の思いも掛けない決断の逡巡。この迷いが「道のためには凡てを犠牲にすべきものだ」（同四十一）という信条を支えられた「猥慾」「禁慾」（同

的生活と「自然の掟」に従って「御嬢さん」に魅了されていく人間的生活との間の「彷徨」（同）に由来していることはいうまでもない。しかし、すでに、「それから」において代助と人妻三千代との愛を「自然の掟」として是認した漱石にとって「慾を離れた恋そのものでも道の妨害になる」（同）と考える「K」の潔癖な禁欲性は否定すべきものであったはずである。潔癖な禁欲性に生きる「K」は、知的にも美的にも倫理的にも勝れた強固な自我の優位性を信じ、「自由と独立と己れとに充ちた」（心上十四）時代を内省の力によって超脱して生きようとした一郎の後身であり、儒教的精神主義者の典型として捉えることができるのだが、この「K」を新たな時代相を映す「先生」の「策略」（心下四十一、四十八）で葬り去ろうとする漱石にとって、その悲劇の設定は、一郎の内省の力の限界性と「自由と独立と己れとに充ちた」近代化の渦中に葬り去られることを余儀なくされている儒教的倫理の歴史的必然を確認するためのものだったということがききよう。

ところで、「K」に次ぐ「先生」の自殺の設定が「心」の漱石にとってどういう意味を持つものであるのか、これは、次の重要な検討課題と考えられるが、ここでまず、新たな時代相を映す「先生」の人物的特性について少し具体的な検討を加えてみたい。

「K」の「剛情を折り曲げるために、彼の前に跪まつく事を敢て」（心下二十二、傍点引用者）する「先生」の友愛には、すでに見てきたように「孤絶の連帯」によって支えられた真情を見落すことはできないのだが、この真情をも無惨に崩壊させなければならなかった漱石は、そこに、叔父の裏切り行為の根底に見たものとは別様の確執——「罪悪」（心上十三）であると同時に「神聖」（同）でもあつた「恋」の不可思議な力を凝視しているのである。「K」の神経衰弱が快方に向かつていくのとは「反比例」（心下二十八）に次第に「過敏になって」（同）いく「先生」の疑惑と不安と検証と策略とそして倫理的痛み。この形象過程に覗く「先生」の特性で特に留意すべきことは、倫理的痛みを覚えながらも「私の自尊心」（同四十八）の保持に傾く確執である。

《彼の超然とした態度はたとひ外観だけでもせよ、敬服に値すべきだと私は考へました。彼と私を頭の中で並べてみると、彼の方が遙に立派に見えました。》お

それは策略で勝つても人間としては負けたのだ」といふ感じが私の胸に渦巻いて起りました。私は其時さぞKが軽蔑してゐる事だらうと思つて、一人で顔を赧らめました。然し今更Kの前に出て、耻を搔かせられるのは、私の自尊心にとつて大いなる苦痛でした。(同、傍点引用者)

「然し今更Kの前に出て、耻を搔かせられるのは、私の自尊心にとつて大いなる苦痛でした」という「先生」にとつて、「私の自尊心」は罪の意識を凌ぐものといわなければならぬ。これは、「御嬢さん」に対して動く愛を「一歩も動けないやうに」(同三十四)した我執―自尊心を守ろうとするための確執に等しいものといえよう。これらを合わせ考える時、「先生」は、「精神優位観」に支えられた禁欲的理想主義でもって俗悪な現実からの超脱を図る「修養第一」の絶対主義者「K」の対極的特性を備えた人物といふことができる。つまり、「人間不信感」に陥りながら利己的現実主義でもって俗悪な現実との対決を図る「猜疑第一」の相対主義者にはかならない。

ところで、この「先生」の策略行為の罪は、直を中に置いて一郎との角逐を続けた二郎の「心付かない暗闘」の延長線上に捉えることができるのである。和歌山における直との同宿以降、二郎の心には「驕慢な発現」「大胆」(兄四十二)さ、「利害の念」(同四十三)「裏から見る」「巧妙な遣口」(同)「軽蔑」「敵愾心」(同四十四)などが一郎に対して無意識のうちに働くのであるが、これらの背後で動く直の媚態へのときめきとか直の寂寥への同情を「空恍け」(帰つてから二十一)、そして、表裏に分裂した生活技と醒めた現実意識でもって生きる二郎の生活姿勢は、「今になって取り返す事も償ふ事も出来ない」(兄四十二)結果を招来するものであつたはずである。この一郎の悲劇的結末を精神の困憊状態にとどめながらも、その救済を結局は「塵勞」として捉えざるを得なかつた「行人」の漱石は、「心」において、一郎の後身「K」を死に追いやり、そして、二郎の後身「先生」の「自由と独立と己れとに充ちた」時代相を映す生の姿勢とその因果に怯えなければならぬ苦渋に満ちた生の中に、絶望に裏打ちされた生の可能性を垣間見ようとしたものと考えられる。

「心」の漱石は、表裏に分裂した生活技と醒めた現実意識でもって生きた二郎の行為と意識を一つの時代の終焉という歴史状況のもとで文化論的に捉えなおし、

そしてそこに、「人から人へ掛け渡す橋」(塵勞三十六)の架設を果そうとしたといえるのではなからうか。「先生」と「私」との関係の形象過程にみられる漱石の重層的認識構造を見落すことはできない。

#### 四 教養派的世代に対する反措定

「高踏的な」(心下二十九)「K」の前で「突然調子を崩せ」(同)ないで「御嬢さん」への愛を隠す「卑怯」(同)とか「虚栄心」(同三十一)、「単なる利己心の発現」(同四十一)でしかない「精神的に向上のないものは馬鹿だ」(同四十一)という虚偽の忠告、「K」を出し抜く求婚と「狡猾な」(同四十七)事後処理……、これらが表裏に分裂した生活技と醒めた現実意識でもって一郎を悲劇的状况へと陥れていった二郎の「心付かない暗闘」(友達二十七)の我執に遡ることのできるものであることは、すでに見てきたとおりである。

ところで、「私の自尊心」にかかずらわる「先生」に懺悔を成立させるために「K」の「死」を必要としなければならなかつた漱石は、孤絶のもとにしき連帯を見出せなかつた時の不幸をそのまま背負っているのであり、これは近代の孤独を鋭利に見通した不幸といわねばならない。これがため、「先生」は、自殺した「K」の頭の重さが「官能を刺戟して起る単調な恐ろしさ」(心下四十九)を越えて深い「運命の恐ろしさ」(同)を喚び起す時、はじめて、「平生の私を出し抜い」(同)た「私の自然」(同)によって厳肅な「懺悔」(同)の言葉を口にすることができるのであるが、ここで重要なことは、この「懺悔」とともに始る「先生」の苦悩に満ちた生活の意味とその生活がそのまま「私」の「新しい命」(同二)の生誕を齎す母胎となる二重構造の意味である。

「Kを忘れる事の出来な」(同五十二)い「先生」の、「不安を駆逐するため」の「猛烈な」(同)「勉強」(同)、「己れを忘れよう」(同五十三)とするための「爛醉」(同)、「仕方がないから」(同)始める「読書」(同)……、これらは、「不愉快」(同五十二)な「厭世的」(同五十三)な「沈鬱」(同)な「寂寞」(同)とした思いを喚び起し、そして、いつしか「不可思議な恐ろしい力」(同五十五)となつて「先生」を「少しも動けない」「牢屋」(同)に閉じ込めていくのであるが、この「不可思議な恐ろしい力」の内実を、一元的に、「K」

を死に追いやった罪意識の桎梏として整理づけてしまふことはできない。石崎等氏は、この「不可思議な恐ろしい力」に支配されていく「先生」の不幸に「性格悲劇」を読み取っておられるが、確かに、「先生」の負目、懺悔、贖罪意識に働いている内省的知識人特有の性格的影響力を見落すことはできない。「先生」の次に見られるような意識構造とそこに表われている性格的特性は重要な意味を持つものと考えられる。

《其内妻の母が病氣になりました。医者に見せると到底癒らないといふ診断でした。私は力の及ぶかぎり懇切に看護をしてやりました。是は病人自身の為でもありませんし、又愛する妻の為でもありませんが、もっと大きな意味からいふと、ついに人間の為でした。私はそれ迄にも何かしたくて堪らなかつたのだけれども、何もする事が出来ないで己を得ず懺悔をしてみたに違ありません。世間と切り離された私が、始めて自分から手を出して、幾分でも善い事をしたといふ自覚を得たのは此時でした。私は罪滅ぼしとでも名づけなければならぬ、一種の気分支配されてゐたのです》(同五十四、傍点引用)

「何かしたくて堪らなかつた」のに「何もする事が出来ない」ままに「懺悔をしてゐた」「先生」が「始めて自分から手を出して」「力の及ぶ限り懇切に」看護を果すその行為の基底に働く「到底癒らない」という医者の診断と「人間の為」という目的意識は、この文脈の中では強いアクセントが持たされているといえよう。

まず第一に、「懺悔をしてゐた」「先生」に「看護」という他者への働きかけを喚び起すために施す「到底癒らない」という危機状況の設定についてであるが、これは、「私の自尊心」に拘泥する「先生」に懺悔を成立させる条件として「死」を必要とした漱石の認識姿勢にそのまま繋がっていくものであり、さらに、これは、「先生」の「腹の中から、或生きたものを捕まへよう」(同二)とする「私」に「新しい命」(同)の再生を期してなされる「先生」の過去の告白が「死」を代償として行われる時の認識姿勢に繋がっていくものである。「心」における漱石にとって、「死」の設定は、人間の裸形の生を原型的に問いなおすための必須の条件であつたといふことができるのである。

次に、第二の「人間の為」という目的意識についてであるが、これが「人間の

罪」(同五十四)の自覚の上に成り立つものであることはいうまでもない。母親を亡くした後の「先生の奥さん」に寄せる「先生」の愛には、「箇人を離れても」と広い背景があつた(同五十四)といえるのであるが、ここにも、「丁度妻の母の看護をしたと同じ意味で」(同)「人間の為」という意識が働いていたといふことができる。ここで留意すべきことは、「箇人を離れて」「人間の為」という普遍性に向つて働く「先生」の意識構造とその生活次元における脆弱な結実度である。深い人間の罪の自覚の上に成り立つ愛は、本来、贖罪志向に裏打ちされた強靱なものでなければならぬ。ところが、「先生」の愛は、日常次元において豊潤な結実を見せようとはしない。これは、「何の方面かへ切つて出ようと思ひ立つや否や」「何処からか出て来て」「心をぐいと握り締めて少しも動けないやうに」(同五十五)し「死の道だけを自由に開けて置く」「不可思議な恐ろしい力」(同)の所為である。ここには、日常次元における現実との具体的な関りを見出す契機はない。「先生」は、内省の力を働かせながら「忍の行」、つまり、「死んだ積りで生きて行か」(同)ねばならないのである。こうした「先生」に、「K」のような精神優位観に支えられた禁欲的理想主義への確信を認めることはできない。

唐木順三氏は、鴉外、漱石などを「素読世代」と呼び、この世代の特徴を「どこかに四書五経的な骨格をもつてゐた。儒教的、武士的な、凡そ卑屈を嫌ふ高潔なものをもつてゐた。たとへそれが四書五経とは全く反対な表現をとつてゐたにしても。」と規定され、さらに、この「素読派の直接間接の弟子である世代」、つまり、大正期の教養派について「教養派の主傾向は豊富な読書、文学と人生論についての古今東西に涉つての読書と、個性の問題であつた。一方に於て広く人生について書物に目をさらすとともに、他方に於て内面的な、狭い個性の奥底へ入りこまうとする。人類と個性、普遍と個、問題はそこにある。類と個の間として種、普遍と個別との中間としての特殊はここでは問題にならない。種としての国家、社会、政治、経済、特殊としての民族、氏族も問題にならない。寧ろそれを軽蔑して全と個、神と個性を直結させようとする」と断じておられるが、この世代規定に従つて「先生」の性格を特徴づけるとするならば、「先生」は非素読世代であり、しかも、反教養派世代といふことができよう。

「先生」の「箇人を離れて」「人間の為」という普遍性に向って働く意識構造は「普遍と個別との中間としての特異」が問題にならない「教養派」的特性の一面を見せながらも、「平生の私を出し抜いて働く」「自然」の力と内省的力との相乗作用によって自己を問いつめる「先生」の「勉強」とか「読書」は、結局、「人間の為」という普遍性への志向を支える自己の内的確立のための力とはなり得なかったものであり、「自分と切り離された他人の事実でなくって、自分自身が痛切に味はった事実」(心上十五)に自己の内的確立の思想的基盤を置く「先生」には、むしろ、反教養派の特性を抑えることができるのである。ここで、「先生」の世代的特性に働いている形象モチーフに注目してみたい。

この形象モチーフの源泉は「それから」の批評精神の中に尋ねあてることができると考えられる。「それから」における漱石は、「野分」の白井道也の人格主義、精神主義を払い去り、学問と批評精神を備えた鋭利な道也と経済的余裕と美的感受性に恵まれた鋭敏な中野輝一とを合体させて「天爵的」「貴族」(それから一)代助を生み出しているが、この代助の形象には、「文芸と道徳」にみられる「ピタリと理想通りに定まった完全の道徳と云ふものを人に強ふる勢力が漸々微弱になる許でなく昔渴仰した理想其物が何時の間にか偶像視せられて、其代り事実と云ふものを土台にして夫から道徳を造り上げつゝ」あるという認識がすでに強く働いていたといつてよからう。

「人が目を持てても、耳を聳やかしても、冷評しても、罵詈しても自分だけは拘泥」(野分六)せず「道」に生きた道也は「素読世代」の典型であるのだが、「高尚な教育」(それから一)と「細微な思索力」(同)と「鋭敏な感応性」(同)と「天爵的」「貴族」(同)とを足場にした「自家特有の世界の中」(同二)で人間および文明の表裏を見通ししながら「頭の中の世界と、頭の外の世界を別々に建立して生き」(同六)る代助は、「教養派世代」の先駆といふことができるのである。この「天爵的」「貴族」の足場の上に純一化される代助の否定的論理の矛盾と観念の呪詛を受けた論理の詐術を裁かねばならなかった漱石にとつて、代助が、全的に肯定することのできない人物であったことはいままでもない。教養派的生に対する批判意識は、すでにこの時点において認められるのであり、「先生」の形象には、この「それから」の批評精神の上に、さらに「無定見の新

らしがり屋と片々たる文壇意識に血の道をあげていい気になっている」門下生に対する批判意識が重なり合つて働き、教養派世代に対する反指定が強く働いたものと考えられる。

ところで、「K」と「先生」と「私」の三者を繋ぐ知識人系譜に留意しながらこの三者の特性を対照的に捉えようとする時、まず、「K」の素読世代としての特性が鮮明に浮びあがってくるのである。これに対し、「私」は不定型ではあるが、教養派的素地を持つ人物として臆な輪郭を覗けるのである。「先生」はこの両者の中間に位置する「過渡期派」としてその特性を捉えることができよう。

「平生の私を出し抜く」「自然」の力と内省的力との相乗作用が齎す「先生」の「不可思議な恐ろしい力」の形象には、「人間全体の不安を、自分一人に集めて、そのまた不安を、一刻一分の短時間に煮詰めた恐ろしさ」(塵勞三十二)に追いつめられながら「なにをどうしても、それが目的にならないばかりでなく、方便にもならない」(同三十一)で苦しむ内省的知識人一郎の底知れない存在不安がそのままに投影しているのである。ここには、定型化された道徳の「型」を喪失し、「自由と独立と己れとに充ちた」(心上十四)時代状況下に新たな内省的倫理の獲得を果そうとする求道者漱石の悲惨な苦闘を見落してはならないのである。

## 五 連帯への志向

厭世憎人的な暗い影を背負う「先生」が、他者に向つてはじめて心を開こうとするその唯一の相手は「私」であるが、この「私」の視点より見た「先生」の特性は重い意味を持つものと考えられる。

世俗の喧嘩に超然とした「非社交的」(心上三)な態度、「素気ない挨拶や冷淡に見える動作」(同四)、「時として」「顔を横切る」「変な曇り」(同六)、「私は淋しい人間です」(同)という述懐……、こうした「先生」の暗い影を背負った言動は、「私」に「近づき難い不思議」(同)さを感じさせながらも、同時に「何うしても近づかなければ居られないといふ」(同)思いを募らせるのである。

《私には学校の講義よりも先生の談話の方が有益なのであった。教授の意見よ

りも先生の思想の方が有難いのであった。とゞの詰りをいへば、教壇に立って私を指導して呉れる偉い人々よりも只独りを守って多くを語らない先生の方が偉く見えたのであった。》(同十四、傍点引用者)

「私」にとって「有益」で「有難い」「先生」の「談話」と「思想」は、洋々とした前途を華やかに示す意気軒昂たるものではない。謎に満ち畏怖に包まれた談話であり思想である。「自分と切り離された他人の事実でなくって、自分自身に痛切に味はった事実」(同十五)を基底にした暗く重いものといいかえることもできよう。

ところで、「先生」の暗い影を背負った言動の奥から明確な輪郭を見せる具体的な思想内容としては、次の四つの事項を抑えることができる。その第一は「恋は罪悪ですよ」「さうして神聖なものですよ」(同十三)という恋愛観である。第二は「金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になる」(同二十九)という金銭の力に関する問題である。第三は「平生はみんな善人なんです、少くともみんな普通の人間なんです。それが、いざといふ間に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです」(同二十八)という人間観である。そして、第四は「私は今より一層淋しい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、其犠牲としてみんな此淋しみを味はなくてはならないでせう」(同十四)という時代認識である。

「近づき難い不思議」(同六)を覚えながらも、「何うしても近づかなければ居られない」(同)ものを「直覚」(同)しながら「先生」への親近度を強め、そして、「先生」に向って研究的に働きかけることもなく無心に傾倒していく。「私」の思想的、人間的变化には、右の四つの思想内容を基調にした「先生」の強い人間の影響を見落すことはできない。「私」のこの変化の特徴を概略的に示すとするならば、それは「儒者の家へ切支丹の臭を持ち込むやうに」「父とも母とも調和しな」(同二十三)いものといふことができる。

「父」の「私」に対して向ける「学問をさせると人間が兎角理窟っぽくなって不可ない」(心中三)という不満、あるいは、「小供に学問をさせるのも好し悪しだね。折角修業させると、其小供は決して宅へ帰って来ない。是ぢや手もなく親子を隔離するために学問させるやうなものだ」(同七)という愚痴、また、二元

来学校を出た以上、出たあくる日から他の世話になんぞなるものぢやないんだから。今の若いものは、金を使ふ道だけ心得てゐて、金を取る方は全く考へてゐないやうだね」(同八)という非難、そして、「何もしてゐない」(同六)「先生」を尊敬する「私」に「御前がそれ程尊敬する位な人なら何か遣つてゐさうなものだがね」(同)と迫る皮肉などを合わせ考へていく時、「私」の具体的な特性はより明瞭なものになってくるのだが、それはすでに見てきた「K」とか「先生」とは本質的に異なる世代的特徴を持ったものである。つまり、家父長的権力に正面きつた反逆を見せない代りに、家父長の支配する富裕な生活基盤に依存し、しかも家督相続のための実学は避け、「職業といふものに就いて、全く考へた事がない位」(心上三十三)な余裕の中で、先学の思想を介し人間とか社会とか時代の様態を根源的に問い直す「二代目」知識人といふことができる。

「血が熱くなったり脈が止まったりする程の事実(同十五)に根ざした「先生」の思想の中に、生きた「教訓」(同三十一)を「真面目に」(同)求め、そして、「肉のなかに先生の力が喰ひ込んでゐると云つても」「少しも誇張でない」(同二十三)ほどの深い精神的な繋がりを「先生」との間に見出す二代目知識人「私」の一途な心情は、「それから」の代助などには見られない無垢な自然性によって支えられたものといえよう。この無垢な自然性は、「先生」の「物を解きほどこいて見たり、又ぐるぐる廻して眺めたりする」(心下三)分析癖とか猜疑心の対極に位置している「余りに単純すぎる」(心上三十二)生命体といふことができる。「私」は「冷たい眼」(同七)で「先生の心に向って研究的に働き掛」(同)けることはない。「私」は、「何うしても近づかなければ居られない」(同六)ものを「先生」に「直覚」(同)しながら「全く自分の態度を自覚」(同七)することもなく「人間らしい温かい交際」(同)を成立させるのである。

このような「私」の「先生」に対する傾倒同化の姿勢は、「行人」の一郎が日との旅の途上で「蟹に見惚れて、自分を忘れる」(塵勞四十八)姿とか「門」の宗助が堅固な扉の前に立ち竦みながら「崇高」(門二十一)と仰いだ「知恵も忘れ、思議も浮かばぬ」「信念に篤い善男善女」(同)の精神に通じるものである。この知恵も思議も浮べず、見惚れ、自分を忘れて「真面目に人生から教訓を受け」(心上三十)ようと願う「私」の純一さは、「先生」の人間信頼を繋ぐ基本的な

要件となっている。この純一さまでも、自死の決行によってしか受容し得ない「先生」の設定には、近代の宿命的孤独を極限の形で生きた漱石自身の不幸が、濃い影を落しているといえよう。「死んだ積りで生きて行かう」（心下五十五）とした「先生の苦悩に満ちた人生を、二代目知識人たる「私」の自我の形成期、確立期の培養土壌としておすおす設定することしかできなかった漱石が、内省的知識人の内的力に再生の展望を樂觀的に開くことのできなかつたのは当然といわねばならない。

「心」の漱石は、「K」と「乃木」と「先生」の三様の「死」を凝視することによって、知識人の内省的力の限界を見定め、そして、個々の人間の力を呑み込むある巨大な力に眼を開きはじめていたといえるのではなからうか。その力とは、「時代の精神」であり、それは多様に輻輳する因果の蓄積を自然の理として統べる歴史のエネルギ―と言い換えることができよう。「乃木」とも「K」とも異なる「先生」の死の特徴は、この時代精神に殉ずるところにあるのであり、そこには、自ら、「乃木」とも「K」とも異なる新たな生の認識が開示されているといえよう。

## むすび

「もし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積だ」（心下五十六）

「私は妻に残酷な驚怖を与へる事を好みません。私は妻に血を見せなくて死ぬ積です」（同）<sup>（註）</sup>こゝした思いを設定する漱石にとって、「先生」の死が「乃木」の殉死に対する批判意識の上に成り立つものであったことは疑いあるまい。

まず、「乃木」の死であるが、彼の死には明治天皇という人格存在に対する至誠と武士道精神に対する強い執着を見ることができるのである。

これに対し、精神優位観に支えられた禁欲的理想主義でもって俗悪な現実からの超脱を図る修養第一の絶対主義者「K」の死には、「乃木」の死に見られるようなある一つの理想に対する強烈な執着を抑えることはできるのだが、それは、共同体的秩序の精神基盤に回帰し得る力を持つものではない。さらに、ある人格的存在への献身に対する執着を伴うものでもない。「K」の死は、まさに、「たった一人で淋しくって仕方がな」（同五十三）い孤独な死である。それは、強固

な個我を保持する内省的知識人の絶対主義が苛酷な自己処刑を重ねたための自己崩壊であり、その死は、相對世界への脱出によって自己救済を図ろうとする漱石自身の生の姿勢の表象にはかならない。

ところで、第三の、人間不信に陥りながら利己的現実主義でもって俗悪な現実との対決を図る猜疑第一の相對主義者「先生」の死には、相對世界に自己回復の契機を求めようとする漱石の、苦渋に満ちた新たな生の認識を読み取らなければならぬ。

故郷喪失という共通した悲運の設定によって、人間の連帯の原拠を捉え、金銭と恋愛の力を機軸にした最も単一な角逐の力学によってその連帯を崩壊させた漱石は、「死」との対峙によって「生」の裸形を原型的に捉えなおそうとしているといえるのだが、「K」の自殺を、はじめ「正しく失恋のため」（同五十三）と思ひ込ませた「先生」に、やがて、重い罪苦と深い寂寥のもとで「私のやうにたった一人で淋しくって仕方がなくなつた結果、急に所決したのではなからうか」（同）と思ひなおさせる漱石は、強固な個我を持ち内省的に生きる知識人の不安と孤独の懊悩を共通項にして連帯の復元を見ているといえよう。

しかし、自他に対し不信を抱く相對主義者「先生」に、「K」と同質の絶対的理想による苛酷な自己処刑など許されるべきものではない。倫理的痛みを覚えながらも、なお、「私の自尊心」に拘泥する「先生」には、「自由と独立と己れとに満ちた」時代相を背負いながら自己防衛のための猜疑心を深める陰湿な我執が強く働いていたのであり、「先生」の「平生の私」を出し抜いて「自然」が厳粛な罪苦を喚び起すためには「K」の厳粛な「死」が必要であつたのである。「死」を代償にしてしか罪苦を自覚することのできなかつた「先生」にとって、儀式的に習慣化された道德の型は無意味なものであつたはずであり、また、こゝした「先生」に、死を永生化する共生の精神的基盤が用意されているはずもない。「精神的に痼性」（心下三十二）な性分と「平生の私」を出し抜いた「自然」と犀利な知力との複合する内省的力の威圧を払い去ることのできな「先生」は、日常次元に具体的な結実もみせない「贖罪志向」をただ心中で拡大しつづけていたといえよう。

「幸福になりたいと思つて、たゞ幸福の研究ばかりし」「幸福は依然として対岸にあつた」（塵勞三十九）「一郎」的不幸、つまり、不毛な内省的贖罪志向を、

「新しい意義を盛」(心下五十六) った「明治の精神」への殉死によって打破しようとした漱石は、「乃木」のように明治天皇という人格的存在に対する至誠を通してその人格の君臨する共同体への回帰を果すことのできない「先生」の孤独な近代の悲劇性を鋭利に見通していたということが出来るのである。

「乃木」の死が「明治国家の創出過程」の「シンボル」として実存する天皇のベルソナ<sup>(註16)</sup>に対する殉死であったのに対し、「K」の死は、強固な個我に裏打ちされた自己の内的理念に対する殉死である。そして、この「乃木」と「K」の二つの死を超越しなければならなかった「先生」の死は、卑小な個別、人為の事象を包摂し複雑多様な因果を重ねながら巨大な必然性を築いていく歴史の流転の力に対する殉死であり、それは、堅牢な共生基盤も強固な個我の存立も許されないままに、自己の内的確立と外的拡充を同時に急がねばならなかった明治知識人乃至は明治国家の栄光<sup>(註16)</sup>ある戦いの挫折の象徴といえるのではなからうか。

卑小な個別や人為を超えた巨大な歴史の流転の力の内実は、やがて、「道草」と「明暗」の世界において具体的に検証されていくのだが、その帰結は、健三の「世の中に片付くなんてものはほとんどありやしない。一遍起ったことはいつまでも続くのさ」(道草百二)と呟く言葉とか小林の津田に予言した「事実の戒飭」<sup>(註17)</sup>(明暗百六十七)の中に尋ねあてることができるといえよう。

〈注〉

- (1) 拙稿へ「門」論(岡大國文論稿1、一九七三、三、六三頁)参照。
- (2) 小泉浩一郎氏は「先生」の自殺描写の背後に「乃木殉死のあり方」に対する漱石自身の内発的な明治の倫理を提示した(「漱石「心」の根底——「明治の終焉」の設定をめぐる——」文学・語学53、一九九六、九、七八頁)誇りを見ておられる。
- (3) 佐藤泰正氏の「存在論的課題は、同時に、ひとつの時代に生き、これに殉じ、志を後代につなぐという倫理的課題とあいからんで『こころ』一編の劇を織りなす」(「文学 その内なる神」一九七四、桜楓社、八六頁)とされる指摘は重要である。
- (4) 相原和邦氏は「先生」の懐疑性の背景として「叔父の裏切りという具體的契機と血縁共同体の崩壊」を抑えられ「そこに生じる『論理』に

「近代知識人の誕生」(「漱石文学における「実質の論理」——「こころ」を中心に——」国語と国文学、一九七二、四、九六頁)を見ておられる。

- (5) へ作品研究「心」(国文学、一九六五、八、二二〇頁)参照。
- (6) 平岡敏夫氏の指摘される「Kを真宗の子とする設定」(「漱石序説」一九七六、塙書房、三四八頁)意味を見落すことはできない。
- (7) 拙稿へ「行人」論——「彼岸過迄」の破綻部より見た構想について——(評言と構想16、一九七九、六、五七頁)参照。
- (8) へ作品論「こころ」(国文学、一九六九、四、一〇八頁)参照。
- (9) へ現代史への試み——型と個性と実存——(唐木順三全集、一九六七、筑摩書房、一〇六頁)参照。
- (10) 同前出書、九四頁参照。
- (11) 猪野謙二氏はへ座談会・近代日本文学史「夏目漱石」(文学、一九六〇、六、九〇頁)において、三四郎や代助を「二代目」という名称で捉えられ、この二代目知識人に対する漱石の批判意識を指摘されている。
- (12) 松岡譲へ漱石の人間について(国文学、一九五六、十二、五九頁)参照。
- (13) 玉井敬之氏は「漱石の周囲にしだいに集りつつあった漱石山房の弟子たちをはじめとするヤンガー・ジュネレイションが、この『私』なる人物にこめられていたのではないか」(「夏目漱石」一九七六、桜楓社、一三三頁)とされている。
- (14) 小泉浩一郎氏は前出書(2)の論文(七八頁)においてすでにこのことに着目されている。
- (15) 橋川文三へ歴史と体験 近代日本精神史覚書(一九七三、春秋社、一九九頁)参照。
- (16) 梶木剛氏のへ「明治の精神」は青年に栄光の「自己本位」をしい、それゆえまた彼らに悲惨をもしざるをえなかったものである。Kもそして先生もその犠牲者だといってよい。(「夏目漱石論」一九七六、勁草書房、一九四頁)という見解を本稿は別の観点より捉える。
- (17) 一つの歴史的必然性を持った内部崩壊劇が推測できる。(拙稿「明暗」論、岡大國文論稿6、一九七八、三、七〇頁参照。)

昭和五十五年二月四日